

<Discontinuité> in the Bergsonian notion of <durée>: Paradoxically after Bachelard

Ryu MURAKAMI

In this paper I will consider <discontinuité> as a positive element of the Bergsonian notion of <durée>.

Since his maiden book, *Time and Free Will* (1889), Henri Bergson (1859-1941) defines time as <durée>, which means uninterrupted continuity of the past, the present and the future. In opposition to Bergson, Gaston Bachelard (1884-1962), who begins to speculate on time in the 1930s, takes time to be essentially discontinuous.

According to Bachelard, it is not continuous <durée> but discontinuous <instant> that does give birth to something new, and this is why he criticizes Bergson. In my opinion, however, at least in the 1930s, Bergson himself tries to reconsider <durée> not only to be continuous but also to be discontinuous.

ベルクソンの「持続」における「不連続性」の契機

——バシュラールによる批判を逆説的な導きとして——

村 上 龍

本稿の目的は、フランスの哲学者アンリ・ベルクソン（Henri Bergson, 1859-1941）に固有の時間概念である「持続」のうちに、逆説的にも肯定的＝実在的（positif）な成分として、「不連続性」という契機が書きこまれている点を明るみに出すことであり、また、ひいてはそのことをつうじ、彼の「持続」概念にあらためて光をあてることである。そして、この目的にさいしては、フランスの思想家ガストン・バシュラール（Gaston Bachelard, 1884-1962）によって提出された、ベルクソニズムにたいする批判的な議論が、ただし、本人の意図を裏切る仕方によって、よき導きとなるはずである。

周知のとおり、処女作『意識に直接与えられたものについての試論』（1889年）（以下、『試論』と略記する）以来、ベルクソンは一貫して時間を、過去・現在・未来の途切れなき連続性として、あるいは、過去を含みもちながら未来へと伸長しゆく現在の厚みとして規定し、時間のそうした側面を名指す用語として、「持続」の概念を提起した。他方、1930年代に時間をめぐる思索を本格的に開始したバシュラールは、時間の本性を「持続」の連続性にもとめる「ベルクソンの直観」（I.I. 18, 19）に対抗して、むしろ「瞬間」を時間の基礎的な単位とみなし、過去や未来から隔絶された「瞬間」としての現在が不可避免的にはらむ「不連続性」にこそ、時間の本質を見いだした。

のちに詳しく検証するが、バシュラールがそのようにして、ベルクソンの時間論にたいするオルタナティヴを提案するのは、「瞬間」の「不連続性」こそが新しさを出来させるという、したがってまた、「持続」の連続性には新しさの創出に貢献するところがないという信念に基づいてのことである。しかしながら、我々のみるところでは、じつはベルクソンは、すくなくともバシュラールがベルクソニズムと批判的に向きあいはじめる1930年代においては、他ならぬバシュラールの意味での「不連続性」の契機を、時間をつうじた新しさの創出の根拠として、「持続」概念のうちに採りこもうとしていたのである。

以上のことを論証するうえで、我々は本稿において、以下のような手順をふ

む。さいしょに第1節では、ベルクソンの第三主著『創造的進化』（1907年）に目をとおし、「持続」の連続性にフォーカスする彼の時間論をてみじかに確認する。次いで第2節において、時間についてのバシュラール独自の考察がはじめて開陳された著作『瞬間の直観』（1932年）に目を転じて、彼自身の時間論をみたあと、つづく第3節では、なぜバシュラールはベルクソンの時間論では飽きたらなかつたのか、あるいは、どうしてバシュラールはベルクソンの「持続」へのオルタナティブを提案しなかつたのかを、やはり『瞬間の直観』にそくして確認する。そして、さいごに第4節で、ベルクソンの晩年の論集『思想と動くもの』（1934年）をひも解き、ベルクソンの視角から逃れできるようにバシュラールの目には映つたものが、じつはそこにおいてたしかに捉えられているということを示したい¹。

第1節 「持続」としての時間における連続性

ベルクソンは『試論』において、「まったく純粋な持続とは、それ〔自我〕が現在の状態と先行する諸状態とのあいだに境界を設けることを控えたときに〔…〕我々の意識の諸状態がとる形式である」（D.I. 74-75: 67）と述べるが、この「形式」についてのよりいっそうの詳細は、『創造的進化』の冒頭を参照するのが簡便である。

著作の冒頭の、「意識ある存在」（E.C. 7: 500）をモデルケースとして「存在」の概念規定を試みるくんだり、ベルクソンはまず、我々の「内的な状態」のもっとも単純な事例として、「動かない外的な対象の視覚」を取りあげ（E.C. 2: 495）、次のように言う。

対象がおなじままであり、私がおなじ側からおなじ角度でおなじ光のもとに見つめたとしても無駄で、私のもつヴィジョンは、一瞬老けたという理由だけでも、やはりつい先ほどのヴィジョンと異なるものになる。私の記憶がそこに控えていて、これが過去のうちの何ものかを現在に押しこむのである。私の気分は時間の道を進みながら、自らの集める持続によってたえず膨らんでゆく。言うなればそれは、自分を用いて雪だるまをつく

¹ なお、本稿は、拙稿「ベルクソンの「持続」における「回顧性」の契機——ジャンケレヴィッチ、メルロ＝ポンティを手がかりに——」（『山口大学哲学研究』、30号、2023年、65-76頁）の姉妹編ともいべき論考である。併せて参照されたい。

るのである。(E.C. 2 : 495-496)

おなじ条件下で同一の対象を見つけたとしても、その行為が「持続」というだけで、「記憶」の働きによって随時、「過去」が「現在」に入りこんでくる。したがって、この知覚に対応する我々の「気分」は、「自分」を材料にした「雪だるま」のごとく、時間がたつにつれ次第に「膨らんでゆく」。このようにベルクソンは、ひいては我々の内的な生の全般を、「過去の現在への延長」、もしくは、「未来を侵食し、進みながら膨らんでゆく、過去の連続的な進展」(E.C. 4 : 498) として、「持続ノ相ノモトニ」(P.M. 142 : 1365) 把握するのである。

第2節 「瞬間」としての時間における「不連続性」

『瞬間の直観』を皮切りに、バシュラールが時間にかんする省察を深めるようになったのは、ディジョン大学の同僚であった歴史家ガストン・ルプネル(Gaston Roupnel, 1871-1946) の、生命進化を主題とする著作『シロエ』(1927年) に触発されたうえでのことである。とはいえ、『瞬間の直観』の冒頭で、「我々の目的は、ルプネル氏の著作を要約することではな[く…]むしろ発展させ」(I.1.7) ることだと述べられている点からも分かるように、一連の論考において提示される時間論²は、バシュラール自身の思索の成果とみなしてさしつかえない。

「持続」よりはむしろ「瞬間」へと傾く「バシュラル的直観³」は、『瞬間の直観』に含まれる次の一節などにおいて、端的に表明されている。

時間とは、瞬間に収縮され、二つの虚無のあいだで宙吊りにされた現実である。時間がよみがえることもありえようが、そのためにはまず、時間は死ななければならないだろう。ある瞬間から別の瞬間へと時間の存在を運び、持続をつくることはできないだろう。瞬間、それはすでにして孤独である [。…] 時間は、我々のもっとも親密な過去とさえ、絶縁してしまう [。] (I.1.22)

² 『瞬間の直観』のほかにも、『持続の弁証法』(1936年)、「詩的瞬間と形而上学的瞬間」(1939年)において、バシュラールは時間について主題的に論じている。

³ 『瞬間の直観』において、バシュラールが仮想敵として論及する「ベルクソンの直観」と対比的に、このような用語を使用することも許されるであろう。

時間の本質は、過去や未来と「絶縁し」て「孤独」のただなかにある、「瞬間」としての現在にこそ求められるべきであり、「ある瞬間から別の瞬間へと時間の存在を運び、持続をつくる」ことなどできない。バシュラールはそのように言い、「時間のまったくもって不連続的」で「断絶的な性格」(I.I. 38)を強調するのである。

第3節 「持続」／「瞬間」の争点としての新しさの創出

上述のように、「持続」を退けて「瞬間」を選びとるにあたっては、バシュラールはもちろん、ベルクソニズムにたいする批判的な視座からそうしている。それでは、そこにはいかなる賭け金が積まれているというのか。バシュラールは どうして、ベルクソンの時間論では満足できなかったのだろうか。

この点について、バシュラールは明示的に論及してはいない。そこで、我々が注目したいのは、バシュラールが折にふれて、「瞬間」としての時間にはらまれた「不連続性」こそが、新しさの創出を担保すると主張していることである。たとえば、彼は『瞬間の直観』において、「かならずや突然に到来する […] 悲劇的な新しさは、「時間」の本質的な不連続性を例証してやまない」(I.I. 15)と述べ、あるいはまた、「生が進行するために」「必要な」「新しさ」は「かならずや瞬間的である」(I.I. 37)ことに言及している。だとすれば、「持続」としての時間にはらまれた連続性を強調するベルクソンの時間論には、新しさの創出を根拠づけるロジックが決定的に欠落しているように、すくなくともバシュラールの目には映ったのではないだろうか⁴。

我々のこの推論は、たとえば『瞬間と直観』の次のような一節を見るにつけ⁵、

⁴ ただし、かりに事の次第がそのとおりであったとしても、すくなくともベルクソンに肩入れする立場からみれば、このような論筋でのベルクソニズムへの批判は、じつは的外れなところがあると言わざるをえない。というのも、哲学的キャリアの最初期からベルクソンは一貫して、「持続」の連続性をこそ、新しさの創出を根拠づけるロジックとして位置づけてきたからである。たとえば、本稿第1節において引用した『創造的進化』の文章の直後で、いみじくも述べられているところによれば、「経験を蓄積して一瞬ごとに自らをかたちづくる我々の人格」は、「根本的にはけって反復することを許されない」「不可逆的」な「持続」として進行するがゆえに、それ以前にはなかった「新しさ」をその都度、身にまとうことになるのである (E.C. 5-6: 499)。

⁵ 生命進化を「持続ノ相ノトニ」捉えるベルクソンが、生命進化における偶発事の発生を不可避的にとり逃がすことになったと断じる、『瞬間と直観』の次の一節にかんし

よりいっそう説得的に聞こえてくるように思われる。

じっさい、もしも瞬間が偽の区切りであるとしたら、過去と未来は人為的に切り分けられていることになるため、それらを区別することがきわめて難しくなる。このとき持続は、うち壊すことのできない統一のうちで捉えられねばならなくなる。ここから、ベルクソン哲学のすべての帰結が導出される。すなわち、ひとつひとつの我々の行為のなかに、我々のごくさりげない身振りのなかにさえ、かたちをなし始めていた性格の完成形が、あるいはまた、開始のうちに結末が、萌芽のエランのなかに存在とその生成のすべてが、見いだされることであろう (I.I. 18)。

過去・現在・未来を別個に「切り分け」ずに「統一のうちで捉え」る見地を、ようするに、時間を「持続ノ相ノモトニ」把握するベルクソンのパースペクティヴを採用するならば、過去のただなかに現在の「萌芽」が、そしてまた、やがて未来には「完成」するであろうもののひな型が現在において、どうしても「見いだされる」ことになってしまう。パシュラールはここでそのように言い、かつ、そのことを否定的に評価している。だとすれば、やはりパシュラールは、過去からすっかり隔絶された現在のうちで、過去にはその胎動をいっさい感知できなかったような新しさが出来るといった事態を、あるいは、現在はその気配すら察知できないような新規さが、現在とはきっぱりと断絶した未来においてもたらされるというような事態を、ベルクソニズムが許容することはありえないと考えていたことになろう⁶。

でも、同様のことが指摘できるだろう。「おそらくベルクソンは、進化の叙事詩を書くなかで、様々な偶発事を無視せざるをえなくなったのである。[...] 生の歴史を綿密に調べるならば、それが [...] 言い直しや時代錯誤、未完の下絵、失敗、やり直しといったものに満ち満ちた歴史であることに気がつく。様々な偶発事のなかから、生のエランが分岐し、系統樹が分枝へと分岐しゆく、そのような進化の活動をしか、ベルクソンは取りあげなかった」(I.I. 23-24)。また、『持続の弁証法』にみられる次の一節なども、この文脈に属するものとみなすことができよう。「生成の創造的な価値は、ベルクソニズムにとっては、基礎的な連続性という事実そのものによって制限される。[...] とくに、現在は何をつくることもできない。現在が過去にたいしておこなうことは、生徒が先生に課された問題を解くようなものなので、現在は何物をも創造することができない」(D.D. 2-3)。

⁶ なお、ベルクソンの意味での時間上の連続性が、じつのところ新しさの創出を担保

第4節 「持続」の肯定的=実在的な成分としての「不連続性」

ところで、バシュラールがベルクソンの時間論へのオルタナティブを考案していた、ちょうどその1930年代に、ベルクソン本人は、じつはバシュラールの意味での「不連続性」の契機を、まさに時間をつうじた新しさの創出の根拠として、「持続」概念にあらためて書きこもうとしていた節がある。

フランスの哲学者ウラジミール・ジャンケレヴィッチ (Vladimir Jankélévitch, 1903-1985) は、ベルクソニズムの粹組みのなかで、「生きた持続にたえず後れをとる」ことを宿命づけられた「知性」が不可避免的に犯すことになる、「出来つつあるもの」から目をそむけ「出来あがったあとの時点」に身を置くことに起因する「持続」への無理解を、「回顧性の錯覚」(H.B. 21-22) と名づけた。この提案にたいして創造的な解釈をほどこすかのごとくに、ベルクソンは1930年代に、ジャンケレヴィッチ的な意味での「回顧性」の契機を、新しさの出来を担保する、「持続」に内属的なロジックとして読みかえようとする⁷。そして、我々の考えでは、この文脈における「回顧性」と、バシュラールの意味における「不連続性」とは、その内実において表裏一体をなすのである。

ベルクソンは、1934年の刊行にさいして加筆された、論集『思想と動くもの』の序論において、おそらくはジャンケレヴィッチの議論をふまえ⁸、「我々の知性に根づいた原理」(P.M. 14 : 1264) としての「回顧の論理」(P.M. 19 : 1267) に論及している⁹。「持続」をつうじて「現実化」されたものは往々にして、そこから翻って、「可能性」として「先在する」という意味において、「現実となるまえに可能だった」と考えられがちであるが、ベルクソンによれば、これは「可能性」という言葉の濫用にすぎない。そして、この種の「錯覚」(P.M. 13 : 1262-1264) を、ベルクソンは「回顧の論理」に基づくものとして断罪するのである。

ここでの議論は、「回顧性」の契機が、「持続」をつうじ出来つつあるものに

しえないのか否かについては、本稿では問わない。我々が問題にしたいのは、すくなくとも1930年代においてベルクソンが、バシュラールの意味での「不連続性」の契機を、時間をつうじた新しさの創出の根拠として、「持続」概念に採りこもうとしていたかどうかである。

⁷ この点については、既出の拙稿において、すでに詳しく論じてある。

⁸ このあたりの経緯については、既出の拙稿の註1を参照されたい。

⁹ 以下の議論は、既出の拙稿の第2、3節とも重なるところがある。

寄り添うロジックたりえないことを主張する点では、ジャンケレヴィッチの提案に忠実である。しかしながら、「ひとたび生じた現実を、それに先だつ諸々の出来事やそれが生じた周辺の状況に結びつけることは、つねに可能である」(P.M. 15 : 1264) と言われていることから分かるように、ベルクソンはジャンケレヴィッチの議論の圏域を越えて¹⁰、すくなくとも「出来あがったあとの時点」に身を置くかぎりでは、回顧的にふり返りみて得られる視野もまた、それなりに当をえたものであるとまで、考えているようにみえる。

たとえば、「持続」をつうじて営まれた、過去の芸術史の展開に言及する文脈で、ベルクソンは次のように述べている。

今日では、19世紀のロマン主義を、古典主義者たちがすでに有していたロマン主義的な要素に結びつけることに、なんらの抵抗も感じられない。だが、古典主義のうちにあるロマン主義的な側面が引きだされたのは、ひとえに、ひとたび出現したロマン主義による回顧的な努力によるものである。[…] ロマン主義は古典主義にたいして回顧的に働きかけた […。] つまり、自らの予兆を過去のうちに創造し、先行者らによって自身を説明したのである (P.M. 16 : 1265)。

「古典主義のうち」「ロマン主義的な要素」が先存したというよりはむしろ、ロマン主義のほうこそが、「古典主義にたいして回顧的に働きかけ」ることによって、「自らの予兆を過去のうちに創造」したのだとベルクソンは言い、しかも、彼はそのことを明らかに肯定的なトーンで語っている。だとすれば、ベルクソン自身の議論においては、「回顧性」の契機はむしろ、一定の事柄を自らの予兆たらしめるべく、現在が過去にたいして遡及的に働きかけることという、「持続」にそなわった肯定的＝実在的な成分として、読み替えられているとみるべきであろう。

そして、我々にとって重要なのは、ここで示されている「現在が過去にたいしておよぼす不可思議な力」(D.S. 229 : 1159) への着眼が、「持続」よりも「瞬間」を好む「バシュラールの直観」と、じつはきわめて親和的だということである。というのも、この「不可思議な力」が招来するのはまさに、以前にはそ

¹⁰ というのも、ジャンケレヴィッチにしたがうかぎりでは、事後的な「回顧性」は、「持続」にそくした営みの実態からかけ離れた捏造として、いかなる意味でも誤謬をしかもたらさない、端的に否定的な契機だからである。

の気配を察することのできなかつた新しさの創出といった事態に他ならないからである。してみると、すくなくともバシュラールがベルクソニスムへのオルタナティヴを掲げはじめた1930年代には、バシュラールが解釈するかぎりでの「ベルクソンの直観」とは相容れず、むしろ「バシュラールの直観」のほうと近いような構想¹¹を、ベルクソンは育てていたことになる¹²。ようするにベルクソンは、事後的にのみ成立する連続性というものに注目することによって、元来、連続性を旨とする「持続」を、バシュラールの意味での「不連続性」をも同時に併せもつ概念として、アップデートしようとしていたのである。

¹¹ なお、このような構想の一端が披歴されている『道徳と宗教の二源泉』（1932年）（以下、『二源泉』と略記する）や『思想と動くもの』を、どの程度バシュラールが視野に収めていたのかは定かでない。というのも、ベルクソンの時間論への言及にさいしては、バシュラールは一貫して、もっぱら『試論』を参照しているからである。

¹² なお、『二源泉』や『思想と動くもの』序論の執筆段階で、ベルクソンがどの程度、バシュラールの議論を視野に収めていたのかは判然としない。

凡例

ベルクソン、バシュラール、ならびに、ジャンケレヴィッチの著作からの引用にさいしては、本文中で以下の略号とともに頁数を（ ）内に記す。ベルクソンの著作にかんしては、単行本の頁数のあとに著作集 *Œuvres*, édition du centenaire, André Robinet (éd.), P.U.F., 1991 (1959^{1re}).のそれを併記する。

Henri Bergson

D.I. : *Essai sur les données immédiates de la conscience*, P.U.F., 2007 (1889^{1re}).

E.C. : *L'évolution créatrice*, P.U.F., 2007 (1907^{1re}).

D.S. : *Les deux sources de la morale et de la religion*, P.U.F., 2008 (1932^{1re}).

P.M. : *La pensée et le mouvant*, P.U.F., 2009 (1934^{1re}).

Gaston Bachelard

I.I. : *L'intuition de l'instant*, Stock, 1994(1932^{1re}).

D.D. : *La dialectique de la durée*, P.U.F., 2013 (1936^{1re}).

Vladimir Jankélévitch

H.B. : *Henri Bergson*, P.U.F., 1959 (1931^{1re}).